私のおすすめ

枕のような

図書

音楽研究科作曲専攻（ソルフェージュ）　1年　根本晃帆

枕のような本がある（註1）。そこには、800ページ以上に渡りオーケストラ作品の詳細（編成、演奏時間、出版社の種類など）がつらつらと記されている。1日中眺めていてもちっとも飽きないこの本は、とある仕事における必需本である。私は『ぱるらんど』（註2）がきっかけで、そのことを知った。

学部1年の後期、『ぱるらんど』が私に素敵な職業を教えてくれた。『The Music Performance Library』という本が掲載されていたのだ。「ミュージック・パフォーマンス・ライブラリー」、アメリカで広く使われるこの名称は、日本では「オーケストラ・ライブラリアン」などと呼ばれている。文字からして、何をしている人か分かるような、分からないような。ピアノ以外の楽器に疎かった私は、この時初めてオーケストラには楽譜を管理する人がいることを知った。指揮者の相棒としてエディション選びに苦悩しながら、世界中の同業者たちと情報を共有し、演奏会を作り上げる姿に胸が躍った。「こんなにわくわくする仕事があるんだ！」と大学生にしては幼稚な感想を抱いた私は、いつかライブラリアンになれたら面白そうだな、とふんわり考えていた。

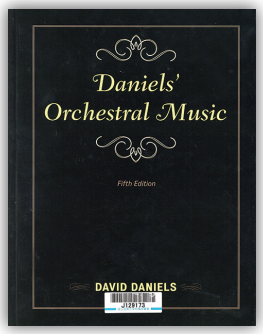
「いつか」は、今年やってきた。

OMF（Seiji Ozawa Matsumoto Festival）及び小澤征爾音楽塾がアシスタント・ライブラリアンを募集しており、私のライブラリアン人生が始まった。楽譜がそこら中に収められているライブラリー室は、パート譜の製本、譜めくりの調整、弦パートのボーイング書きなど、初めて行う作業に溢れた空間だった。自分が準備した楽譜によって音が鳴らされた瞬間、言葉では表現できない感情が湧き上がった。

19歳の私があの日、図書館で呑気に夢みていたことが実現するとは、今でも嬉しさに頬が緩む。ダニエルの本をお供に、今日もライブラリアン修行が私を待っている。

註：
1.『Daniels' orchestral music』
David Daniels Rowman & Littlefield c2015
2. 2013年11月発行『ぱるらんど281号』のこと。

請求記号●X-078b/D



ねもと　あきほ　●　私のライブラリアンデビューは、ビゼーのオペラ《カルメン》でした。奏者やスタッフたちと刺激的な時間を過ごしました。

和楽器による『ボレロ』

CD

図書館員　岡本さやか

学生のとき、ソルフェージュの授業でラヴェル作曲『ボレロ』の分析をしたときのことでした。先生が「こういう『ボレロ』もある」とおっしゃって流し始めた『ボレロ』。一瞬普通の『ボレロ』と変わりないように思えるのですが、よく聴くと響きが違うのです。フルートではなく篠笛がメロディを奏でるなど、和楽器の演奏による『ボレロ』だったのです。

異動で図書館に来てから、ふとその『ボレロ』のことを思い出したのですが、授業で聴いたときは音源のタイトルも編曲者も演奏者も聞いていなかったので、ヒントのない状態でした。OPACでキーワードを変えながら検索し、最後は地道に詳細画面を確認しながら、このCDを見つけました。

授業で聴いたものと同じかどうかは今となってはわからないのですが、こちらは池辺晋一郎の編曲によるもの。『ボレロ』は2種類のメロディが繰り返されるけれど楽器の組み合わせはすべて異なるというのはご存知のとおりですが、解説によると「楽器の種類と数がオーケストラに比べ少ないので、やむを得ぬ原曲のカットを最小限ほどこした」とのこと。でも楽器の組み合わせの違いや倍音の表現などもちゃんと反映されています。伝統的な和楽器が思いがけない効果を生んでいたり、十七絃や二十絃箏といった比較的新しい楽器も取り入れられていたり、『ボレロ』なんだけど和の響きというのがなんともカッコイイのです。一味違う『ボレロ』をぜひ聴いてみてください。他の収録曲も近代フランスの名曲が並んでいて、私のように普段邦楽はあまり聴く機会がない・詳しくないという人にも親しみやすいのではないでしょうか。

気になるけれど詳細がわからないという資料も諦めずに探してみると、きっと新たな出会いがあると思います。図書館員もお手伝いしますので、遠慮なく聞いて、どんどん探してみてください（図書館員としてはヒントは多い方が助かりますが）。そして某先生、このCDじゃなかったらごめんなさい。

『ボレロ・ジャパネスク / 日本音楽集団』
King 1987
請求記号●XD3692
＊現在は廃盤

おかもと　さやか　●　ボレロを聴くとき、音量を冒頭と最後どちらに合わせるか悩みませんか？前半大きくしすぎて最後の方で慌てて下げる派です…。